

ブナケの出現について

頼 茂

1. ま え が き

本県におけるサケの水揚量は昭和52年を境にして1,000トン台に、54年以降は2,000トン台にと昭和51年以前に比べて、大きな飛躍を遂げつつあるが、本県各海区の年別漁獲量及び割合の推移状況は表1及び図1のとおりである。

特に津軽海峡区における水揚量が異常に顕著な伸びを示しているのが目立つ。但し、その反面最近ブナケの漁獲割合が増大し、価格並びに生産額の面に大きな影響を与え始めている。それがどのような状態で推移しているかについて本県日本海側で最も多くサケの水揚げをし、銘柄別〔（註）参照〕に詳細な記録を行なっている深浦漁業協同組合における実態をとりあげて考察並びに今後の対策について検討を行なったのでその結果について述べる。

2. ギ ン ゲ

深浦漁協における10月から12月にかけて、定置網で漁獲されるサケをブナケ（ブチ）とギンゲ（ギラ、キンピカ、メカジキ）の2種類に区別して、年別割合を示すと表2のとおりで、ギンゲの出現率がブナケの割合より多く、これまで言われてきた「ギンゲの出現率はブナケの10%以上」という説を裏付けているものの最近、ブナケの出現率増大という現象がみられるようになってきた。これが何時を境にして生じたのか又、局所的な現象として考えてよいものなのか定かではないが、表2でみる限りでは、ギンゲの来游量が年々低下の傾向にあることは事実である。ギンゲは銀白色光沢が強く、二次特徴が現われず鱗も薄くて剥れ易く、粘膜層は薄い。また筋肉は赤味が強く、水分が少なく脂肪分が多い。卵は黄色に近くて少なくふ化率も悪く、その上若年魚が多く、雌に4～5才魚が少ないといわれているが、これらギンゲは日本海側においては、富山県等の南へ早期に回帰する魚群及び1月以降に来游する魚群にギンゲの割合が多い傾向がある。

一方、日本海で春先のマス延縄又は流調に混獲されるサケは総てギンゲであるが、これについて他海区から侵入南下してきたトキシラズ群ではないかとの説があるが、プログレスレポートで述べたように他海区からの侵入南下群が漁獲対象となっているのではなく日本海で周年棲息成育したものが、マスと同様時期を追って北上回游する際混獲の対象となっているものとの考え方が妥当な線のように思われる。〔日本海区水産研究所1979. 2, 移殖効果の安定強化P 18～21（参照）〕

3. 深浦におけるギンゲとブナケ出現状況

深浦漁協に水揚げされるサケのギンゲとブナケの漁獲割合を過去12ヶ年分について、表2に示した

が、ここでブナケの割合とはブナケと呼ばれるものはもとより、キズもの、奇型もの、ホッチャリも含んだもので、当組合ではサケの銘柄を19に分けて記録していることは表2（註）のとおりである。又、取引関係上ギンゲと称されるものの中にも純粋に区別するならば、ブナケに属するものと思われるものも多少含まれていることは歪めない。それにしてもギンゲの割合が年々減少し、ブナケの割合が増大の傾向にあることは、表3の時期別割合表からみても歴然としており、事実サケ漁に従事する漁業者が感覚的に洩らしているブナケの割合が年々増大傾向にあるとの声と一致している。但し、昭和52年以降1月の後期群にギンゲの出現率が高くなりつつあるのは群の交替によるものと思われる。このギンゲを採卵用親魚として蓄養した場合へい死率がブナケに比べて高いという難点がある。このことから早期群のギンゲを蓄養した場合、下手すれば逆に早期群をカットする結果になりかねないことを考えると、ギンゲの蓄用技術に関しては慎重且つ開発の検討が必要である。なお、ここ12年間の経過の中でブナケの割合は最高で23%（昭和46年）最低で1%台（昭和44年）となっているが最近3ヶ年のそれは17～18%とこれまでの最高最低の年を除いた平均割合5.3%（6～11%）の3倍強に近い値を示している。この現象は唯本県日本海側のみにみられる許りでなく、本県太平洋側においても同様の傾向がみられ、白糖漁協の例を表4に掲げたがここでは昭和44、45年頃の10%以下のブナケの割合がここ3ヶ年に10%以上を占めるに至り昭和54年には一抛にその4倍にも及んでいる。一方聞くとこころによれば北海道においては、ブナケの占める割合が全体の60%を超えるということであるが、このようにブナケの割合が増大した原因として後期群のサケ卵の比率が増えたこと（表5）餌付放流によって成熟度が早められたこと及び、最近寒流系勢力が強大化し且つ広域に亘る傾向にある海洋環境が大きく影響を及ぼしているものと思われ。

深浦におけるサケ漁は、10有余年前には、10月に漁獲の山がみられていたという。現在では11月下旬から12月中旬にかけての単一峰か、1月に入って今一つのピークが現われるといった移り変りを見せているが、本県の太平洋側の新井田川、馬淵川においては9月から10月にかけての早期群の山が、12月の後期群の山より大きい昭和50年以降二つの山が現われるようになってきたのは後期卵を長期に亘って移殖した結果によるものと思われる。（図2）

4. 深浦漁協に水揚げされるサケの経済的位置付け

漁協市場に水揚げされるサケが同市場に水揚げされる総水揚げ量並に水揚げ高に対して、どのような位置を占めてきたか、その推移と重要度について量的且つ、経済価値について調べたものが表6であるが、年々その占める比率が高くなってきている。このことは、最近の日本海側におけるサケふ化事業（表7）の増大がもたらした結果によるものとみてよからう。

5. ブナケ増大の及ぼす影響

総水揚げ量は増大してもこのようにブナケの漁獲量割合が増加することは、流通経済上好ましいこと

ではない。即ち、価格の低落といったマイナス面を招来し、サケ漁業者特に定置網漁業者にとっては採算割れになる恐れがないとはいえない大きな問題を抱える可能性がある。（深浦における年別サケ平均単価を表8に示した）このことは恰もこれまでイワシ、サバ等の多獲性魚にみられたように大漁貧乏と同じ轍を踏む危機を多分に孕んでいることと類似する点がある。その可能性はサケの倍增計画の確実な実施によって充分予見されるところであり、その時期の到来は加速的に早まるものと予想される。その一つの現われとして既に北海道では卵の確保上の問題もさることながら漁場による生産不均衡を是正し、サケの価格調整を図る意味からも、強力な生産調整の段階に入っていると聞く。県境をもたないサケについては何れ本州側各県間においても同じような意味で早晚本問題の解決を図るために総合調整の機会がもたれることは必至であろう。

6. これらに対する対策

サケの生産過剰からくる諸々の問題に対処し、解消してゆくために先づ考えられることは、これまでの高級魚として取扱われてきたサケのイメージをダウンさせないためには、如何なる方法を探るべきかといったことが提起されると思われるが、やはりギンゲ作りを根本的に考えなければならないのではなかろうか。それには早期群の卵を確保することが先決である。次に考えられることは現状のままで推移すれば、果して高級魚として維持できるか否か甚だ疑問視される点である。現在の国策による量的確保が今後充分行なわれるとした場合、商品価値の問題、即ち量より質への問題が当然起きてくるものと考えなければならない。そのとき一般多獲性魚並に格下げして供給していくより手がないのか、加工することによって価格維持を図るかであるが、反面高級魚として取り扱う分については、北洋もの或は輸入物に頼るといった線が出てくるとも充分考えられる。斯ることからサケの価値観と価格の下落を防止保護し、少なくとも中、高級魚としてのイメージを維持する方法の一つとして、技術開発による海中養殖のギンゲ作りということが考えられるが、何れにしても現状から推して将来予想される生産過剰という問題と、ブナケ増大による価格面の調整をどのようにしてゆくかという二つの問題は今後のサケ生産上更に大きな課題として早急に検討が加えられなければならない点である。

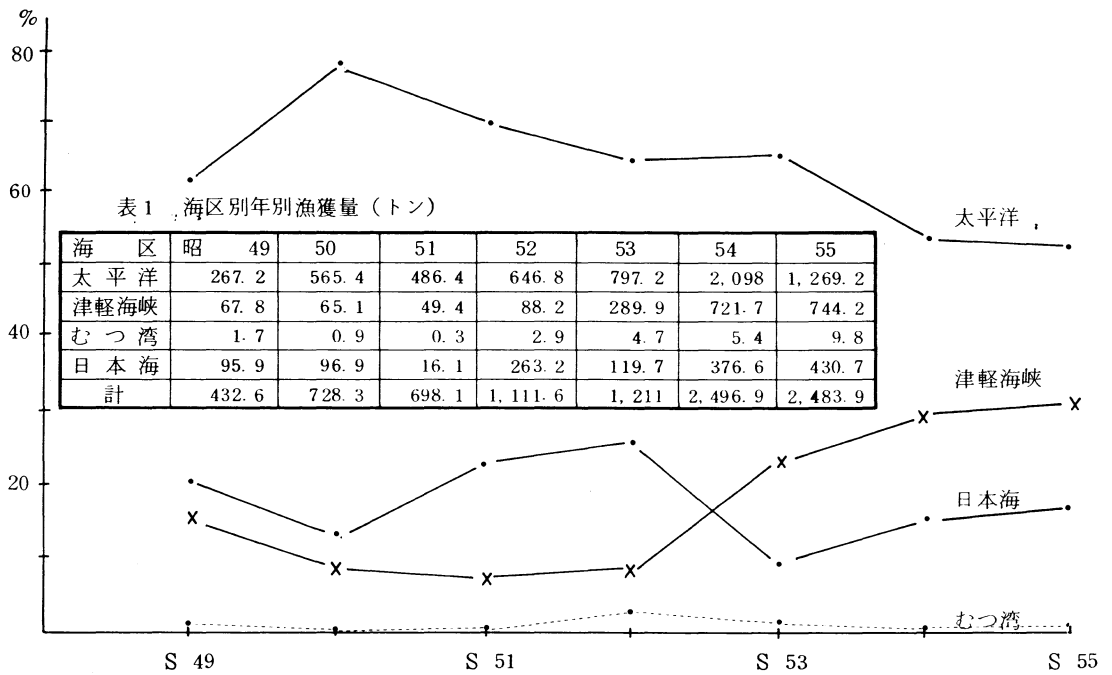


図1. 海区別年別サケ漁獲推移 (%)

表2. 深浦漁業協同組合 (但し大型定置のみ)

	漁 獲 量 (10～12月)		
	kg	ギ ン ゲ	ブ ナ ケ
昭和44年	10, 806	98. 9	1. 1
45	24, 567	92. 8	7. 2
46	12, 774	76. 9	3. 1
47	35, 043	89. 6	10. 4
48	47, 998	88. 7	11. 3
49	48, 065	91. 0	9. 0
50	47, 958	92. 2	7. 8
51	81, 009	93. 4	6. 6
52	116, 150	93. 8	6. 2
53	56, 790	82. 9	17. 1
54	183, 649	82. 8	17. 2
55	181, 334	83. 4	16. 6

表4. 白糠漁業協同組合

	漁 獲 量 (10～12月)		
	kg	ギ ン ゲ	ブ ナ ケ
昭和44年	15, 751. 4	91. 5	8. 5
45	8, 638. 9	98. 0	2. 0
46	21, 214. 5	99. 0	1. 0
53	63, 296. 1	89. 3	10. 7
54	259, 493. 4	54. 2	45. 8
55	176, 632. 4	79. 5	20. 5

(注) 男サケ
女サケ
中サケ
小サケ
ブナケ男サケ
ブナケ女サケ
ブナケ中サケ
ブナケ小サケ
ホツチャリ
奇 型

キズ男サケ
キズ女サケ
キズ中サケ
キズ小サケ
ブナケキズ男サケ
ブナケキズ女サケ
ブナケキズ中サケ
ブナケキズ小サケ
ピ ン

表 3. 月別ギンゲとブナケの割合（深浦漁協）

	昭 50		昭 51		昭 52		昭 53		昭 54		昭 55	
	ギンゲ	ブナケ	ギンゲ	ブナケ	ギンゲ	ブナケ	ギンゲ	ブナケ	ギンゲ	ブナケ	ギンゲ	ブナケ
10 月	82.4	17.6	95.3	4.7	80.6	19.4	95.7	6.3	51.1	10.9	90.5	9.5
11 月	93.9	6.1	97.7	2.3	93.6	6.4	88.4	11.6	88.3	11.7	87.6	12.4
12 月	83.9	16.1	82.3	17.2	95.0	5.0	76.0	24.0	70.0	30.0	74.3	25.7
1 月	0	100	0	100	56.2	43.8	55.2	99.8	51.7	48.3	62.1	37.9

表 5－1 日本海側各県移植状況（千粒）

	昭 4 0	4 5	5 0	5 4	備 考
全日本海	5,071	2,982	20,020	70,163	
青 森 県	500	300 (20)	2,540	12,800	() 内は雅魚 (万尾)

表 5－2 5 ケ年間隔県外移植卵範囲（千粒）

	昭 4 0 ～ 4 4	昭 4 5 ～ 4 9	昭 5 0 ～ 5 4
全日本海	970 ～ 5,300 (2 ～ 4)	2,982 ～ 15,750 (4 ～ 6)	9,700 ～ 70,168 (4 ～ 11)
青 森 県	0 ～ 1,000	300 ～ 1,300	150 ～ 12,180

() 内は移植県数

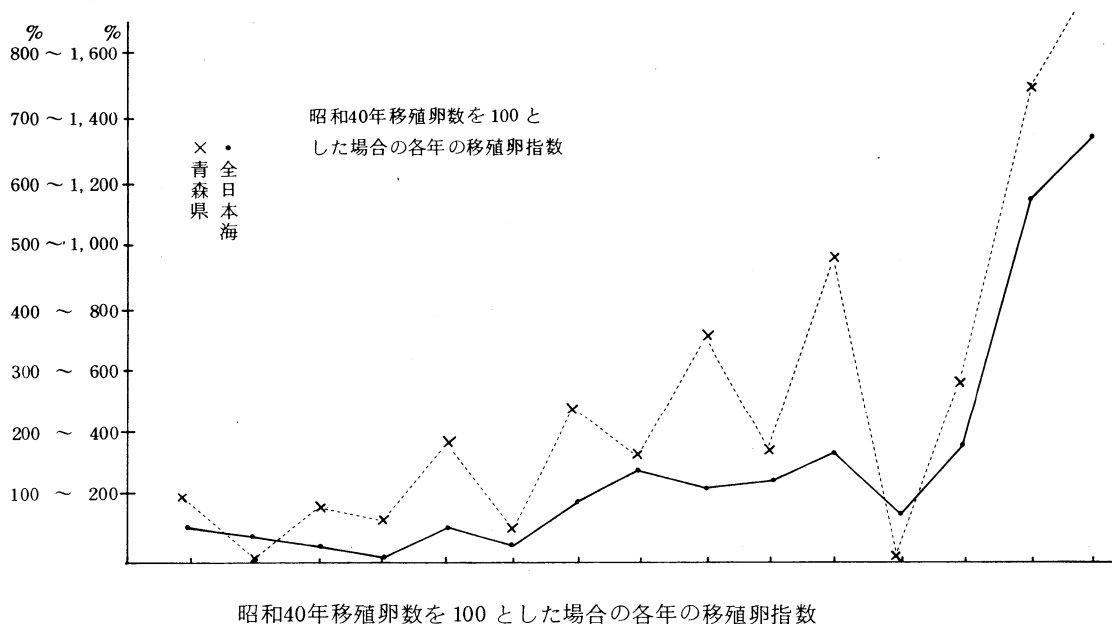


表6 深浦におけるサケ魚の位置付け

	サケ漁獲量	サケ水揚げ高	水揚げ高順位
	総漁獲量	総水揚げ高	
昭 50	2.0 %	4.3 %	5 位
51	3.0	7.2	2
52	5.7	5.6	2
53	2.8	4.9	4
54	9.9	8.9	3
55	7.9	11.6	3

表7 本州日本海側各県のサケふ化場数とサケ稚魚放流推移

県 名	昭 40		昭 45		昭 50		昭 54	
	ふ化場数	放 流 数	ふ化場数	放 流 数	ふ化場数	放 流 数	ふ化場数	放 流 数
青 森 県	1	714	2	543	2	2,425	5	14,343
秋 田 県	6	8,460	7	10,568.8	7	12,883	12	41,266
山 形 県	7	28,442	6	50,303	22	101,418	24	82,833
新 潟 県	5	5,243	5	3,519	16	16,571	23	32,489.1
長 野 県	0	0	0	0	0	0	1	457.9
富 山 県	4	1,281	5	3,235	7	20,386	7	36,780
石 川 県	0	0	0	0	0	0	2	4,633
福 井 県	0	0	0	0	0	0	1	935
京 都 県	0	0	0	0	0	0	1	985
兵 庫 県	0	0	0	0	0	0	1	450
鳥 取 県	0	0	0	0	0	0	2	1,100
計	23	44,140	25	68,178.8	54	153,683	79	216,266

表8 深浦におけるサケの年別平均単価 (kg当り)

	昭 5 0	5 1	5 2	5 3	5 4	5 5
単 価	円 806	円 954	円 880	円 902	円 503	円 808

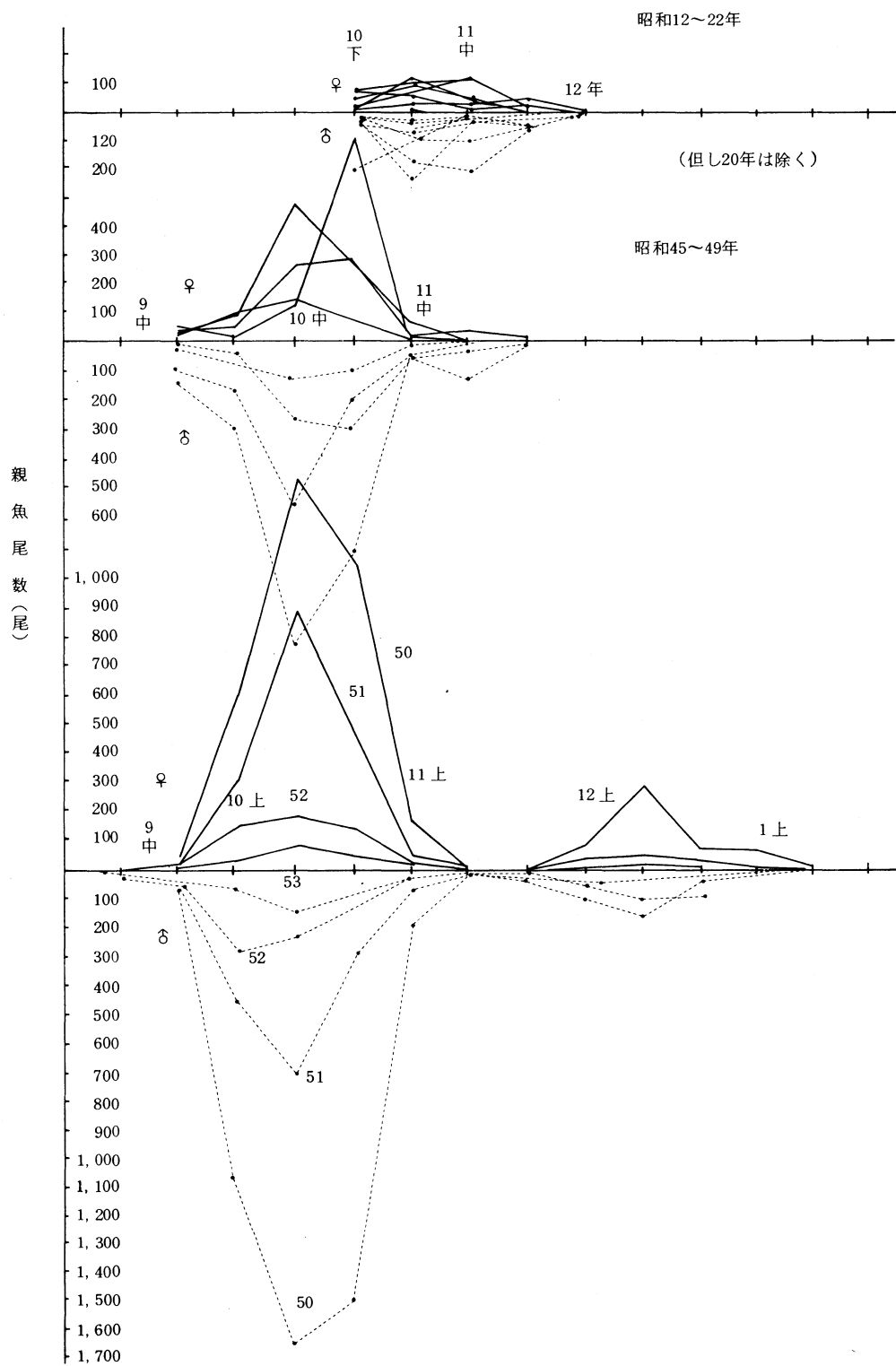


図2 新井田川サケ親魚旬別・雌雄別漁獲尾数